

# 黒髭物語

biwanosin

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人理焼却事件、発生。人類に残された最後のマスターは、未来を取り戻すためサーヴァントを召喚し――

「おやおや、これはこれは奇遇ですな。デュフフフ。黒髭、参上ですぞー！緑は敵ですぞー！」

「令呪を持って命ずる。『黙って』！『頭を床にめり込ませろ』！」  
前途多難である

# 目次

ただただキモい	—	1
海賊は愚者へ告げる	—	6
神造禁忌御子 淡島 ①	—	24
神造禁忌御子 淡島 ②	—	35



## ただただキモい

始まりの印象は、最悪だった。

見た目は小汚い。半裸なのはまあちゃんと鍛えられている体だったからいいとして、しかしその見た目が小汚い。髪とか髭とか、もうこれはねえだろって思わずにはいられなかった。

もうその時点でげんなりとしていた私としては、もう口を開くの待ちたくもなかったのだが、相手がそんなことを気にしてくれるはずがない。さあコイツは初対面で何を言うのか。その内容次第では評価を上向きに更新してもいいかななんて思ったところで。

『おやおや、これはこれは奇遇ですな。デュフフフ。黒髭、参上ですぞー！緑は敵ですぞー！』

これである。下向き修正せざるを得なかった。緑は敵とか言われても誰のことだその緑って、となるしかない。そんなツツコミをしながら、うん？と何かが引つ掛かった。その正体を自分の中で探っていると、『黒髭、参上ですぞー！』の一文が頭をよぎる。黒髭、すなわちエドワード・ティーチ。海賊とかの方面に全然興味の無い私でも知ってい

るその名前、海賊の代名詞、最も有名な海賊。それが、これか、と。絶望すら抱いた。海賊が好きな人が知ったらと考えると合掌せざるを得なかった。そんな思考のもとつい無言で合掌したら『おやおや、もしやマスター、拙者のファンでしたかな？ だったら、普段は絶対にしてないんですけどー、サインとかハグとかサービスしちやおつかなーwww』とか言い出したので反射的に令呪で『黙って』『頭を床にめり込ませろ』と命じてしまったが、私は悪くない。なのにドクターには怒られた。解せぬ。しかも変質者のサーヴァントには気にしない心の広さを見せつけられた。ますますイラついてきた。

そして召喚で来たのがそんなサーヴァント<sup>変態</sup>だったため、また英霊の生前の力を再現できるだけの素材がカルデアになかったためにフランスやセプテムには連れていかなかった。もちろんメインの理由は前者である。さすがに私情だけで一切素材を渡さなideいたらロマンとかダヴィンチちゃんとかに怒られてしまうので適度に渡していくが、まあ連れていくことはないだろう。だって変態である。一体何の役に立つというのか。変態だぞ変態。

とか思っていたら、まさかのオケアノスで敵側に黒髭である。さすが黒髭、敵でも味方でも気持ち悪いとは恐れ入った。

マスターからかなり嫌われたらしく、召喚されてからほとんどやることはない。エドワード・ティーチ、通称黒髭はそんな生活を送っていた。

もちろん、何もしくなくていいというわけではない。特異点攻略のためマスターとマシユが色々やっている間、彼は別行動で素材回収に励んでいた。

様々な英霊を召喚できるよう、独自に開発されたカルデアの英霊召喚システム。マスターの紡いだ縁があれば本来召喚できないような英霊すら召喚しうるそのシステムは優れていたが、召喚の幅を広げた分のツケは存在する。それが素材だの種火だのである。

格落ちした状態でサーヴァントを召喚し、召喚後に手を加えることでその力を全盛期のものへと移行させる。サーヴァントによつては生前以上に強くなることもあるらしいが、まあそれはいいだろう。

なににせよ。黒髭は、そういった素材を回収していたわけだ。

当然、彼としても不満はあった。最初のあれがダメだったと言われても、それが黒髭と言う男であり、エドワード・ティーチという海賊である。人理を救うためにと呼び出しをかけられそれに応じたのだから、それくらいは許容してほしい。

それ以前に、彼は海賊である。それを小間使いのように扱うマスターに対して不満がないはずがない。だって海賊だぞ、海賊。自由を求め、死と隣り合わせの海へ出た大げんかの集団、そのトップだ。不満がないなんぞありえない。そんな彼はその日のノルマ量の回収が完了し、ダヴィンチちゃんへそれを届けていた。同室にいたロマンが悪いねと本当に申し訳なさそうに言い、ダヴィンチもそれに続く。黒髭はそんないつも通りのやり取りに対して、鷹揚にも、いつも通りに返した。

『いえいえ、構いませんぞー。むしろ美少女に完全無視アーンド放置プレイ、その上で顎で使われるこの状況、ゾクゾクしてきますなーwww』

.....

まあ、うん。一応マスターよりも年上であるのだし、スタッフが多くいるこの部屋では緊迫した雰囲気満ちている。そんな空気をちよつとでも軽いものにしようという気配りも含まれている……はずだ。

そうして彼はその場から去る。向かうのは自分に与えられた部屋、マスターやマシユ、女性スタッフの部屋からマスターの意向によって離されたその部屋は完全防音であり、監視カメラの類も存在しない。すなわち、彼だけの空間。大男はベッドに腰かけた。誰からも邪魔されず干渉されないこの空間であれば、彼の本音も、

『いやーつと今日の分のノルマが終わったことですし！アニメの続きが見れますなー。

あ、ちょっと待った、今一瞬スカートの中映った！巻き戻し、コマ送り……つしやー！  
お宝発見ですぞー!!』

.....

えっと、うん。ちゃんと不満を抱いている……はずである。

そして、そこから日曜朝の女児向けアニメマラソンを開始して6時間後。

『すまない黒髭、緊急事態だ！管制室まで来てくれ!』

『えー。拙者、今忙しいのですがー』

『思いつき後ろからプリ〇ユアのOP聞こえてきてるんだけども!?!』

むしろ呼び出しに対して不満そうにするとは、黒髭、どういった見だこのヤロウ。

## 海賊は愚者へ告げる

起こった事態はこうだ。

まず、敵側のボスをやっているのが黒髭であると判明した。次にマスター藤丸立香が一切の考えなく、突撃を命令したのだ。

ドレイクがその気持ち悪さに攻撃を命令するのはわけが違う。海上戦のノウハウもない一般人が、自分の知っている黒髭だけを参考にして攻撃を命令したのだ。当然、ロクなことにならない。その戦線は、最悪の形取とい走う結末に終わった。本当に、面白もなく、意外さもないほどに、当然の結末であった。

乗り込んできた敵兵を海へ突き落とし、一定数の犠牲も出しつつ。ヤケになって騒ぎ出したマスターを気絶させて。躊躇うことなく尻尾を巻いて逃げ出した。

これが、敗北の様子。特別書き綴ることもなく、これだけで語り尽くすことが出来てしまう情報事項。

故に続けて、敗走後のことを語るとしよう。とはいえ、これも特別なことはない。極めて当然のことが言い渡されただけだ。

言い渡したのは、不可能を成し遂げた女フランシス・ドレイク。言い渡されたのは、人

類最後のマスター藤丸立香。言い渡された内容は、頭を冷やして来い。

ただその一言を告げ、ドレイクは船を補強する材料を取りに行く。船員は今できる範囲で船の補強作業を行い、特異点で出会ったサーヴァントは迷うことなくドレイクについていった。

ただ一人。マシユだけはどうしたものかとオロオロしていたのだが。立香がドレイクについていくようにと言ったことにより、躊躇いながらも補強材料を集める作業に向かう。

さて、これより語られるのはほん的一幕。

ある一人の人間が、ほんの少し、変わった瞬間である。

〓〓〓

負けた。敗北した。惨敗した。

本当に、どうしようもなく、あの黒髭に負けたのだ。

ドレイク曰く、元々のスペックで負けているらしい。だから、あの場で負けたのは当然の結果なのだとか。

「まあ、だからって私のせいなのは変わらないよね」

ここまでではつきり負けてしまえば、それも分かる。今回の敗北の、被った被害の原因として私が入っていないわけがないのだ。

私の印象だけで、黒髭……エドワード・ティーチという海賊を甘く見ていた。そんなはずなのに、だ。

通称黒髭。エドワード・ティーチ。あるいはエドワード・サッチ。偽名の可能性が高いその名前は、世界で最も有名な海賊として知られているものだ。そんな存在が、ただ気持ち悪いだけの存在であるはずがない。どうしてそれだけ名前を残しているのか、どうしてここまで有名になったのか。——どうして、これまでであつた英霊たちと同じように座に登録されたのか。それを考えれば、当然のこととして分かるべきことであつた。

一つ、深呼吸をする。その後、周囲を確認する。船から離れてきたし、ドレイクさんたちが行ったのとは逆の方向へ向かつてきた。周りには誰もいない。覚悟さえ決まってしまえばその行為へ移るのは難しいことではないけれど、誰かに見られているところでやるのはちよつとためらわれた。

「ダヴィンチちゃん、聞こえてる?」

『……ああ、聞こえてるし見てるよ。大丈夫かい?』

「あー、そっか。そっちからは見えてるんだよね」

今思い出した。さて、どうしたものか……

もういいか。うん、大丈夫大丈夫。このことを弄ってくるような人はカルデアにはいないはずだ。

「黒髭、こつちによこしてもらってもいい？」

『……ああ、勿論だとも』

さて、いづくぞー！

〓〓〓

カルデアから特異点へ召喚され、マスターの前に現れた黒髭。彼の視界に真っ先に飛び込んできたのは、自身のマスターであるはずの存在の土下座である。当然、何をしてるんだコイツとあの黒髭が冷静になった。真顔になった。これはこれで一つの事件だろう。

そして。そんな黒髭に対して土下座したままマスターが語ったのは。

この特異点でこれまでに起きたこと、その全てである。

誰と出会い、誰と敵対し、誰に敗北し、今どのような状況であるのか。

この時、彼女は一つの幸運に恵まれた。それは、彼女が語ったのが「現状」ではなく、

「この特異点で起こったことを時系列順に」であったことだ。もし仮に前者であったのなら、海賊黒髭は何のためらいもなく自身のマスターを撃ち殺していただろう。

情けない姿を躊躇いなく晒すマスターなど、見捨てることにためらいはなかったのだから。

しかし、彼女が出会った存在、その名前が黒髭にそんな思考を与えなかった。

黒髭は。

冷酷にして無慈悲。バカを演じる天才にして、たった今隣で語り合った存在を切り捨てることすら躊躇わない、相対する全てを震え上がらせる大海賊、エドワード・ティーチは。

弱く、情けなく、愚かしいマスターの懇願を受け入れた。

目の前に転がる醜態をさらす肉塊への感情など、その存在の名前一つで翳み消える。

〓〓〓

さて、こうして英霊黒髭が合流したわけなんだけど。その後の顛末についてはざっくりすつ飛ばしてしまおうと思う。

いや、語ってもいいかとは思ったんだけどね。誰かの物語というものは、きつとそう

いうものではないんだ。君たちが知っている過程について、改めて私が語る必要はない。多少の差異はあろうとも、起こる結果が同じである以上語るようなことはないんだ。こことは違う場所、違う世界。そこでifを語った時のように。語るべきは「君たちの知らない過程」と「起こった結果」の2つだけ。それが私の役割であり、私の趣味なんだから。

というわけで、だ。その後の顛末について、簡潔に語ってしまおう。

カルデア一行とフランシス・ドレイク一行は無事的黒髭を撃破し、その場で裏切ったヘクトールによって敵サーヴァント黒髭消滅、と言ったように起こって言った結果は、君たちの知る正史とまるで変わらぬ。簡潔すぎるって？だって全て語っても面白くないだろう？呼び水の下、どうぞ君のたどった軌跡を思い出してほしい。

さて、それでは皆様お待たせいたしました。これより語るのは、起承転結における「結」。場合によっては、結よりも後の出来事。

平和な場所で行われる、命がけの作業のお話だ。

〓〓〓

「……何やってるでござる、マスター？」

「いや、見ての通りだけど」

第三特異点オケアノスを修復して。カルデアに戻ってきた私がしたことといえば、再びの土下座である。

ひとまず、私の中で。あの時の土下座は『協力をして欲しい』という土下座であって。許してもらえたとは、微塵も思っていないのだ。

だから、彼の部屋を訪れて土下座をしている。だから、ここから口をつく言葉がある。「貴方を召喚したとき抱いた感情。私はこれを否定するつもりはありません」

これは、どうしようもない事実。というかそもそも、コイツ意図的にそれを演じているだろう。

「ただ、それでも」

それでも、まだ頭は上げない。

謝ることがあるのは、どうしようもない事実だから。

「ただの一般人でしかない私の印象で、あのように扱ってしまつて。本当に、申し訳ありませんでした」

ただの素人でしかなく。ただの一般人でしかなく。ただの子供でしかない。

特殊な出生もなく、特殊な能力もなく、特殊な経歴もない。

本当に、ただの凡人。非日常に招待されて浮かれて。魔術という超常の世界で無駄に

気を張って。人類最後の希望だなんてもてはやされて調子に乗っただけの、ただの人間なのだ。

そんな人間が底を覗けるほど、人類史に名を刻んだ英霊という存在は、甘くないというわけだ。

何なら、こつちが覗かれていたのだろう。それでもやってこれたのは、ひとえにこれまでに出会った英霊がまるで気にしなかったか人格者であったためだろう。人類史がかかっているのでは仕方ない、という感情もあるかもしれない。

「この件について、望むのなら、私に払えるものなら、どんな代償でも払う」

だが、だ。この海賊黒髭が、そんな考えを持つているとは思えない。場合によってはあつさり私を殺せる人間だ、と教えてくれたのはあのドレイクだ。

「だから——」

そして。この大海賊の力は身をもって体験したし、身をもって体感した。

「だからどうか、その力を貸してください」

その力は、この旅路に。人類史を救うために、必ず必要になる。

「貴方の知恵、経験を私達に貸してください」

なら、私なんかの頭でいいのならいくらでも下げよう。

「貴方の力を、私に貸してください」

私程度の人間が醜態をさらせばいいのなら、いくらでも晒そう。

「私が許せないのなら——この旅路の後、殺してくれて構いません」

私の命でこの力を得ることが出来るのなら……どうしようもなく体は震えるけれど、それも差し出そう。

「だから、どうか……私たちを、助けてください」

ここにきて、私はようやく。人類史を救うという言葉の意味と、英霊という存在の大きさを知った。

〓〓〓

二度目の土下座である。そしてふぎけて返したら、真面目な返答が返ってきてしまった。

さてどうしたものか。とりあえず銃を取り出しながら考える。

弾が込められていることを確認して、みっともなく下げるその頭に照準を合わせた。とりあえず引き金を引こうとしたところで、指が止まってしまった。止まってしまったのは、仕方ない。原因は分かっている。

再び、銃をしまった。

「正直、飽きたら殺してやるつもりだったさ」

そして。こうなつちまった以上、本音を語るしかないだろう。椅子を引つ張つて座り、未だに這いつくばるマスター<sup>肉塊</sup>へ視線を投げる。

「ああそうさ、オレは殺してやるつもりだった。何ならついさつき、呼び出された時にもそうするつもりだったんだよ」

それなりに本気の殺意が漏れているのだろう。身動き一つする気配もない。これすら感じ取れないのなら……まあ、前言撤回して殺しただろう。

いや、殺さなかったかもな。それほどに、あれは衝撃的だった。

「尊敬していた。黒髭が、誰より焦がれた海賊だった」

結局、口をつくのはその感情だけだ。

だから、それ以外の感情を忘れてしまっただけなのだ。

「太陽を落とした女。世界一周を成し遂げた星の開拓者。生前から誰よりも憧れた女に出会えただけじゃねえ。その船に乗り、旅をした。船を並べ、同じ敵へ挑んだ。そして

――

ここまでなら、耐えられたかもしれない。だが、これは駄目だ。これだけは、耐えられなかった。

「そして、オレの船に。オレが舵をとる船に、フランシス・ドレイクが乗った。あのフラ

ンシス・ドレイクが、だ」

絶頂とは、まさにあの感情を言うのだろう。誇りも命も全て海においてきた海賊としてはあってはならないことに、あらゆる欲望が、あの一時消えてしまったのだ。

「その原因がテメエだつてんなら……ああ、いいき。許してやる」

そう決めた。この海賊黒髭が、そう決めたのだ。

どうしようもない悪党とはいえ、自分ではつきり決めたことをたがえない程度のプライドはある。故にそう決めて、そう告げて、そのまま体の向きを変える。殺意は、もう完全に消え去った。

「というわけでマスター、今後も協力しますから部屋を出て行ってくださいますかな？

拙者ー、早くアニメの続きを見たいでござるからしてwww」

資料室でゲットした戦利品を手に、普段通りの態度でそう告げる。もうこの話は終わったのだと、はつきり示すために。

と、それを感じ取ったのか。マスターも顔を上げて。

「……姉姫？」

「おやおや、これは意外。マスターこつちも知ってる人でしたか。いやー、拙者最近姉物にはまっておりまして」

「ふーん……推しはっ？」

と。視線を先ほどまでの態度からは考えられない、対等な立場であると宣言するモノにして問うてきた。

これは……拙者には、分かる。コイツ、ただ物ではない。

「……それは、どつちののだ？」

「そんなの、どつちにも決まってる」

交わされたのは、たったそれだけの短いやり取り。しかしお互い、それだけで全てを感じ取り……強く、固く。手を握り合った。

〓〓〓

「本当に先輩は大丈夫なのでしょう、特異点から帰ってきてからずっと黒髭さんの部屋にいますが……」

「んー……まあ、彼女なりに何か思うところがあつたんじやないかな、とは思うけど」  
特異点で怒っていたことを何一つ知らないマシユは心配しているが、ロマンは特異点での彼女の行動を全て知っている。その立場からすれば、彼女が黒髭の下へ向かったことは驚くほどのものではない。

まあそれでも。医師という立場としては、口を出さないわけにはいかなかったのだ

が。

「ここですね。……黒髭さん、失礼します。ここに先輩が来ていると思うのですが……」  
ロックがかかっていなかったからだろう。扉は自然に開き……その惨状をあらわにした。

それは、一種の地獄なのだろう。2メートルを超える男と一般的な体格の女。その二人が床に正座して、モニターに映し出される映像を見ている光景など、的確に表す言葉が存在しない。

「あ、マシユ。どうしたの？」

「い、いえ、その……戻ってこられないのでどうしたのかな、と」

「あー、そう言えばもうそんな時間でござるな」

「いやー、早いねー」

「それで、その、お二人は一体何を……」

「姉物のアニメをマラソンしてる」

一瞬でマシユの脳は容量オーバーを起こした。

「いやー、しかし。やっぱりこれは至高の作品と言わざるを得ないよね」

「ホントでござるな」。他の要素を全て取っ払うという、一見して凶行でしかない選択。しかしそれを完璧にコントロールし魅せるこの在り方」

「この芸術は間違いないく、あの人にしか構成できない……いやー、うん」

「本当に素晴らしい」

そんなマシユへと何のためらいもなく突きつけられる新たなる情報。この二人は何の容赦もしない。

「お、姉嬢じゃないか。懐かしいな、一巡だけだけどボクも見たことあるよこれ」

「あ、ドクターも知ってるんだこれ」

「うん。まさかのヒロインは姉のみ、しかもその人数が10人越えていうキャラが薄まってしまいそうな構成なのに、全てのヒロインのキャラがたっており、しかも『姉』であるが故っていう一品だろう?」

その言葉が全てだったのだろう。藤丸立香とエドワード・ティーチはもう1つクツシヨンを取り出し、ドクターの席を準備した。何のためらいもなく、自然な動作で彼はそこに座る。

残されたのは一人、脳の容量オーバーを起こしているマシユだけである。

「あ、あの……」

と。ちょうど終わったのか円盤の取り換えを行っているタイミングでようやく復帰して、口を挟んだ。

「そもそも、『あねもの』とは何なのでしょうか……?というか、お二人はいつの間にそ

「こまで仲良く……?」

そんなマシユの疑問は他所に。立香と黒髭は視線をかわす。

そこに言葉はなく、そんなものを優に上回る情報のやり取りがあった。

『どうする?』

『引きずり込む』

『オーケー、取ってきてくれ』

『任された』

すつと立ち上がった黒髭は部屋を出てどこかへ向かい、立香はマシユの手を取って自分の隣に座らせる。

「え、その、先輩?」

「大丈夫、マシユ。姉物が何なのかは、すぐに分かるから」

「いえ、できるなら説明をして欲しいのですが……」

「見た方が早いよ、今黒髭が『ぼくあね』を取りに行ってるから」

「いえ、ですから……」

「大丈夫、面白さは保証する。34話くらいだし」

「それは結構な量なのでは!?!」

驚愕を隠せないマシユをよそに黒髭が帰ってくる。その手にあるのは何枚もの円盤

と飲み物、スナック類、軽食。完璧な布陣である。

この後。当然のこととして四人で一作のアニメを見続ける。ダヴィンチちゃんはそのれを把握していたものの必要なことだろうと止めなかったため、なんの邪魔も入ることなく見続けるのだった。

余談であるが。マシユもばつちりはまりましたとき。

〓〓〓

さて、何ともしまらない終わり方をしたものだけ。これで彼女と海賊の物語、その序章が終わったわけだ。

あれだけのわだかまりがあつたというのにアニメ程度で解決してしまうなんて、と納得できない諸兄もいることだろう。だからここで、はつきりと述べさせてもらおう。

まず、一つ。黒髭はフランシス・ドレイクという存在との関わりにこの上なく感謝してしまっている。結果として、いくつかのハードルが下がってしまったのだ。生前からどうしようもないほどにあこがれた存在というのは、それくらいの大きさは持っている。むしろその程度なのであれば、彼にとつて彼女はその程度の存在だったということになってしまいうけで……それは、望むところではないだろうか？

そして、二つ目。これが大きいんだけど、まあ完全に心を許しているわけではないのだ。それはここで行われたことではなく、この後行われていくことなのだから。

しかしまあ、これもやっぱり同じことで。結果が同じになることである以上、語られることはない。何のためらいもなく飛ばさせていただくので、そのつもりでいてほしい。

魔の霧に覆われた死の世界、ロンドンを超え。

再現された神話の戦争舞台、イ・プルーリバス・ウナムを超え。

新生された愚王による領域、キャメロットを超えた。

では次は？当然の流れをたどるのであれば、神秘けぶる最後の世界。魔獣と人間による戦争の世界、バビロニアへと向かうことになるのだが……それでは、意味がない。

このまま二人は第七の特異点を修復し、最後の特異点を修復して世界を救いました、なんてシナリオが許されるはずがない。なにせそれは、当たり前前の経路を当たり前前にたどっただけの、運命に乗っただけの物語なのだから。そんなものに、この場で語るだけの価値はない。

さあ、この世界ゆえの特異性を語ろう。海賊たちが次にたどる特異点を。彼女たちが8度目に体験する特異点を。

それは、これまでに発生した中で最も小さな特異点だ。

それは、本来特異点となるような歴史はない特異点だ。

それは、とある復讐者アウエンジャーのなりそこないが現れただけの特異点だ。

それは、彼女たち最後の冒険を繰り広げる特異点だ。

A D.???? 神造禁忌御子 淡島

哀れなできそこないは、その命を終える。

## 神造禁忌御子 淡島 ①

「というわけで、特異点だ」

「どういうわけだつてばよ」

円卓の騎士、女神ロンゴミニアド、人間ベデイヴィエール、神の化身フアラオ達、暗殺者の語源たる異端者たち。そんな存在達が彩っていた特異点を突破したのはつい先日のことであり、そこで得られた情報から最後の特異点を特定しようとしているのではなかったか。

「もしかして、もう第七特異点が特定できたのですか?」

「いや、そっちの特定はまだなんだ。紀元前、神代ヘシバの焦点を合わせる作業は思ったより難航しているね」

と、マシユの質問へロマンが答えた。すなわち今回特定された特異点は魔術王ソロモンによって作られた人類史の根幹たる7つの特異点ではなく、何かの折に発生してしまつた特異点か、こちらの妨害を目的として作成された特異点か、あるいは……

「ハロウィンとかのあのバカ騒ぎだったら、私は今すぐ逃げるよ」

「さて、特異点の詳細説明に移ろうか」

「オイ、こっちの目を見て答えろよロマン」

「先輩、その口調は女性としてどうかと思いますので……」

マシユに止められてしまつては仕方ない。問いただすことはあきらめ、話の続きを聞く方針へ変更する。

「とまあ濁してはみたけれど、正直あんな感じのバカ騒ぎではないと思うよ。何せ今回観測された特異点は、時代としては神代のものだ」

「神代……つてことはやつぱり、第七特異点？」

「しかしそうと思える要素が何一つない」

と、ダヴィンチちゃんはモニターの前で肩をすくめる。

「時代背景としては紀元前800年ごろ、場所は日本の淡島周辺と来ている。日本における神代真つただ中ではあるけれど、だからといって人理に対して影響を及ぼすだけのことが起こつてはいるはずもない」

「バカ騒ぎだと考えられないのは？」

「この時代に対して介入してのけるだけの人物だよ？バカ騒ぎのつもりでやっていたとしてもバカ騒ぎなんて呼べるはずがない」

なるほど、道理だ。本人がどんなつもりであったのだとしても、それがこっちにとつて冗談にならないのであれば大事、普通に特異点として処理するしかない。

「というわけで迷惑をかけてしまいうけれど、異常事態だ。特異点の規模は最小クラスであり、今は第七特異点のことがある。こちらが損傷を受けてる可能性があるから無視してしまおうかとも思ったんだけど……」

「いやいやいや、それは駄目でございますよー」と、足元から声が。

「いいですか、皆さん。船つてものは、小さな穴一つで沈没する……それどころか、小さな違和感一つでも放置すれば確実に沈没するまで行くもんです。大仕事の前だからこそ、とつとと払拭してしまふべきでしょう」

「とまあ、生前の経験に基づいたのであろう大変含蓄あるお言葉をいただいたわけなんですけど……」

そして、ダヴィンチちゃんが私の足元へ視線をやる。それでようやく視認していいものだと判断したのか、この場にいる全員の視線が私の足元に。仕方がないので私も、嫌々ながら足元へ視線を送る。

両手足を拘束して、簀巻きにして、目隠しをして、腰の部分にロープを付けてここまですりずりつてきた黒髭の姿が、そこにあった。

「えっと、どうしても気になるから聞いてもいいかな？」

「はいどうぞ、ロマン」

「たしか君たち、昨日の夜仲良くアニメマラソンなんぞしてたよね？」

「はい、時に共に涙を流し、時に激しく議論を行い、時にキャラクターの言葉にできない心情を憂い。この世全ての創作、その未来に幸あれと……そう願う時間を過ごしていました」

「うん、まさかそこまで深く濃厚な時間を過ごしていたとは想定外だった」

この黒髭、世の創作に対する思いがものすごく強い。そんな塊と肩を並べ、作品を視る……そう過ごしている間に、私にも移ってしまっていた。

「で、まあ、うん。じゃあなんでそうなるの？」

「や、なんか幼い顔つきの女性スタッフをストーキングしてたから、犯罪者を野放しにしちやいけないと思ってる」

「よくやった」

当然の結果として、褒められた。とはいえ特異点へ向かうのであればサーヴァントをこのままにしておくわけにはいかない。目隠しを外し、手枷足枷を外す。簀巻きに使ったものは使い捨てのものなので、もうそのまま引きちぎってもらった。

「あー、ちよいキツメ美少女であるマスターにこうして扱われるのも、中々……」

「ねえ黒髭、せめてもう少しでいいから、海賊黒髭としてカッコいいところを残してくれないかな？ そろそろ黒髭の持つ英霊としての価値を完全否定しなきゃいけないるん

「だけど」

「そこはほら、拙者、親しみやすい海賊をモットーにしておりますからなあww」

「最凶最悪の海賊が何を言ってるんだ……」

親しみやすさ、なんてものはこの黒髭に存在しない。今でこそお互いに肩を組んでバカ騒ぎできるようなものになったし、先ほどのように扱っても冗談としてお互い笑い飛ばせる関係になったものの、笑顔で部下を殺せるような海賊だ。これが親しみやすいのであれば世の反英霊は99%誰もが笑顔になる英霊である。

「はあ……まあいいや。黒髭、いける?」

「どーせ行けないって言っても行くって言うのがマスターでしょう? ほら拙者サーヴァントですから、マスターの命令には従うしかありませんし——」

「黒髭がそんな愁傷な心掛けを持ってくれているのなら、私たちはあんなに特異点で苦労してないと思うんだけどな——」

もちろん戦闘面での苦労ではなく、日常的な面での苦労である。この黒髭、とことん女性ウケが悪い。男性ウケも悪い。この見た目にこの口調だから仕方ないとは思うし一切同情しないのだけど、そのせいでこっちに苦労が回ってくるのだけはどうかしてくれないだろうか。

それでも海賊黒髭、エドワード・ティーチの名前を出せば向うの対応も変わってくれ



「おー、いいねえ。海は広く、風は気持ちいい。良きかな良きかな」

「拙者としても、久しぶりに船を出せたのは助かりますな。ここしばらくは砲台だけばかりでござったし」

と、マスター・藤丸立香とサーヴァントライダー・黒髭は水平線を眺め眩く。無限に広がる大海原と言うのは、それだけで心躍る光景だ。

「今回は」

と、そんな二人の下へマシユが口を挟む。

「黒髭さんがいてくれて助かりましたね。まさかレイシフト先に陸地が見られず、海の真上に落とされるとは」

「あれは本当にひどい。ドクター、どうなってるの？」

『いやあ、本当に申し訳ないとは思ってるんだよ？』

などと、説得力の欠片もない声。

『ただこう、レイシフト前はよく掴めず、日本であることしかわかってなかったんだ。海があるだろうと予想はしていたけれど、それがまさか、』

「目で見える限り、点々と島があるだけとはなあ」

『日本の歴史に照らし合わせると』

と、次はダヴィンチちゃん口を挟む。

『日本と言う国がまだできていない、イザナミとイザナギの時代ではないかと疑いたくなる状態だね』

「そこまでの神代にしては、それらしいものもない。いたって普通の海でございますよ？」

『うん、まさにその通り』

海の蛮族黒髭の言葉だけでも十分ではあったけど。

『レイシフト先が紀元前であることは間違いない。しかし、その世界からは神代の要素は観測されていない。故に、これは仮定の話になるのだけど』

魔術的観測結果は、その事実を補強してくれる。

『まあいつもの通り。これは聖杯によるものじゃないかな、と』

「そもそも特異点だし、聖杯はあるよね」

『うん。そして、この特異点からは常に薄くではあるが魔力が観測されている。種類としては、冬木のアーチャー。彼の宝具が一番近いかな』

「あー……固有結界、だっけ」

自らの心象風景を現実の上書きするとか、本来は悪魔が持っていたものとか、まあ色々習った記憶はある。理解はしていないが。

『何にせよ、だ。聖杯の力でもって、この世界を上書き……いや、上塗りし続けている、という可能性があるわけだ』

「こーんな海だらけの世界を、となると。拙者の同業者ですか？」

「その可能性はあるかもね。というか、海が心の風景つて時点で他を考えづらいかも」

「海賊、商人、漁師、開拓者……いずれにせよ、海を渡り続けた人物である、と」

『んー、それも考えづらいかもよ？』

と、再びの忠言。

『それこそほら、黒髭くん』

「はいはい、なんでございましょう？」

『君が英霊となり、宝具を獲得するとして、だ。その船以外の選択肢はあるのかな？』

「まあ確実にありませんな」

即答である。

「そこまでなんだ？」

「まあ、はい。自分に置き換えてみると、船以外はありえませんか。しっかしそうなる  
と、海を描くのは誰になるのやら」

「……それこそ、これが心象風景なら。この風景から持ち主を特定することもできるの  
であらう。」

とは、マシユの意見。なるほど、言われてみればその通りだ。

『うーん、発想はいいんだけど、難しいかもしれない』

しかし、万能の天才はやりわりと否定する。

「それはまたどうして？」

『それがこの世界、おそらく無理矢理に上書きしたからだろうね。現実と心象が混ざりあっているようなんだ』

ロマンの言葉に、この世界のいびつさを感じる。何とも中途半端な世界だなあ。

「……まあ、でも」

なんて結論を出して。マスターとして、方針を口にする。大丈夫、間違っていればカルデアの人達が指摘してくれるし、海特有の見落としも黒髭がいる。百点満点の答えはこの後、皆と協力して出せばいい。今いるのは、マスターとしての意見だけ。

「とりあえず、大した陸地が無い以上、このままアン女王の復讐号で船旅。協力してくれるサーヴァントを乗せつつ、原因を探る」

協力してくれる現地のサーヴァント探しは、必須だ。思い出すのはメモロットのこと。令呪二画分の魔力を渡し、その上で大分無茶をして魔力供給を続け空を駆けたアン女王の復讐号。甲板には私たちの他にもハサン達をはじめとするサーヴァントを乗せて攻め込んだあの時……百貌の性質もあって、この船は円卓の騎士が放つ宝具すら耐

えきるだけの城攻めを成してくれた。

おかげさまで特異点修復後しばらく私は倒れていたわけんだけど……今回は空を走るわけでもないし、大丈夫だろう。

「で、食料は魚か、チマチマある島を調査しつつ調達する……って感じで、どうかな？」  
『うん、いいんじゃないかな。食料に関してはカルデアから送ることもできるし、気にしなくても大丈夫』

「それではそれではー！」

と、方針の決定と共に黒髭がハイテンションになった。いやな予感しかない。

「黒髭海賊団の新メンバー探しに出発ですぞー！ デュフフフフフフフフフフ。美少女幼女サーヴァントはどこですかー！！」

蹴り落とした。

一切の躊躇いなく、船から海へ、全力で蹴り落とした。大丈夫、これくらいは本当に許される仲になっている。

「あ、マスター。あちらに小島が」

「ナイスマシユ。ほら黒髭、早く上がって来い。行くよ」

「えー、何この拙者に厳しい世界」

自業自得だろう。

## 神造禁忌御子 淡島 ②

「ええいクソ、なんだこれは！特異点へ召喚されたと思ったらマスターも聖杯もない野良サーヴァントだど!?この私をもてなす姿勢も見せないとはどういうことだ！」

「よし黒髭、怪しいサーヴァントだ。今すぐ処理するぞ」

なんか見覚えのある金髪がいたので、即座にサーヴァントへ指示を出す。真名しかわかっていない相手だが、伝承から考えても戦闘能力があるとは思いつらいし、有ったとしてもそれは海の上だろう。マシユもいるし、うん。いけるいける。

「あの、マスター……」

と、そんな判断で命令を下しているとマシユからの一言。

「確かに彼は怪しく疑わずにはいられません……先ほどの発言から察するに」

「特異点へのカウンターでしょうなあ」

続ける形で黒髭からも。なんてこった、そっち側なのか。

『まあ、確かに』

そして、さらなる発言が管制室から。

『海と言う場において、彼がカウンターに選ばれることは極めて有効な手だ。本人の性

格はともかく、ね』

うーむ、ここまで言われてしまつてはもう、認めるしかないのか……

「あ、お前たち！」

と、何とか現実逃避できないかと考えているとお声がかかつてしまった。これはもう、逃げようがないな。

「いつまでこの私を、イアソンを待たせる！特異点だぞ!?とつとと来ないか！」  
 やっぱサメの餌にしようぜ、コイツ。

〓〓〓

私が変わるきつかけとなった特異点、オケアノス。そこでの最後の戦いは、それはそれは苛烈なものだった。海上を駆る三隻の船。内2つ、海賊の物が砲撃を続けつつ接近し、乗り込んだ。黒髭は躊躇うことなくタツクルをかまし、前蹴りに鉤爪にとケンカ殺法。最後には至近距離で砲台を召喚しヘクトールを撃つ等、まあ優雅さの欠片もない野蛮な戦いであつたわけだが。そんな攻め方をされた敵方のリーダーが、彼。ギリシア神話における金羊の皮を巡る物語で有名なアルゴ号の船長・イアソンである。

……まあ、残念なことに「ヘラクレスは最強!」、「メディアに肉柱にされた」という

二つの印象が強すぎるのだけだ。

〇〇

「全く、何故私がこんな野蛮な船に……」

「あのねえ」

アン女王の復讐号に乗り、そうぼやくイアソンに対し、つい耐え切れず口を出す。そうでなくとも仮契約を交わす身、コミュニケーションは大切だ。

「確かに髭ほったらかしだったりする連中の船だけどき。気さくでいいやつらだし、何より船は結構なものだよ？」

「ああ、そこは認める。この船は性能面でも功績面でもかなりのものだろうさ」

「おや、素直ですこと。」

「だが、私が乗るに足るだけの品性があるとは到底思えないね。アルゴー号を出した方がよっぽどいい」

「魔力消費半端ないでしょ、戦闘時以外は却下です」

神代の船とか……あの王女メデアが動力源になって動かしていたような船とか、どんな消費魔力なのか考えたくもない。ふざけるな。

「ふん、まあいい。それで、今回の目的はこの特異点の修復だったな？」

「うん、そんなところ。そこまで大きな特異点でもないから、放置って手もあつただけ  
ど」

「打てる手を打つに越したことはない。小さな問題を放置してどれだけの影響を及ぼす  
か、考えたくもないね」

「この辺りは、黒髭と同じ意見。正反対なようで二人とも海に生きた男である、という  
ことなのだろう。いやはや、どうしたものか。」

「あー、クソ」

と、一人問答をしているとイアソンの方がめんどくさそうに頭をかきむしり。

「聞きたいことがあるんだろ？とつと聞きなよ」

「……隠せてなかった？」

「バレバレだったの」

「いやー、うん。さすがは英霊、こっちの考えなんて御見通しか。」

「じゃあ、単刀直入に。私たちは貴方を信頼してもいいの？変なことか、考えてない  
？」

「少なくとも、しっかりと協力してやるつもりだよ」

信頼するかは勝手に決めれば、と。そんな感じで即答されてしまった。

「オケアノスでのことだろ、どうせ」

「まあ、うん」

「だったらあの場であったことも、それなりに覚えてるんだろ？」

それなりにどころか……あの特異点での出来事は、ほんの小さなものまで含めてすべて覚えている。

「つまりは、そういうことだよ。あのメディアが、私の望みをあの手段で叶えようとしたんだ。それはつまり、それしか選択肢が無いか……少なくとも、聖杯を使う中では一番可能性があったんだろ」

「だから、もう聖杯に期待はしてない？」

「私の収める国が無い中で王になったって意味がない。だったら、人類史のことを考えもするさ。癪だけどね」

ほー、へー、ふーん。

「メディアのこと、むっちゃ信頼してません？」

「信用だ、信頼じゃない」

苦虫を噛み潰したような表情で、そう告げる。

「あの魔女の恐ろしさは身をもって知ってるし、それ以上に能力の高さも知ってる。それだけのことだ」

「……だから、やっても無駄だって分かってるし、協力してくれる、と?」

「ああ、人類史に選ばれた英雄として、精々協力してやるさ」

だから嫌なところをついてくるな、と言われてしまった。でも、彼は協力の意志を見せてくれている。今だって勝手に船を出すこともできるのに、文句を言いながらアン女王の復讐号に乗っている。トドメに、英雄として、なんて言葉だ。

……彼に習って、信用くらいはしてもいいかもしれない。

「そういうことなら、よろしくね」

「あーはいはい、よろしくよろしく」

生返事をして、再び海を眺めるイアソン。大丈夫そうだと理解してマシユ達のところへ戻ろうとして、途中で振り返る。

中にくつろぐのではなく、外で海を眺める。そんな背中になるほどなあ、と納得して。私は皆のところへ戻った。